新型コロナウイルス感染症下での博物館活動
～横浜みなと博物館の対応及び活動事例

横浜みなと博物館　島宗　美知子

2019年末から世界を席巻した新型コロナウイルス（以下COVID-19）により、内外の博物館はその活動が制限された。当館も感染症拡大防止のため2020年2月末から3か月ほど休館し、お客様とスタッフの安全安心に配慮しつつ活動を再開した。再開に至るまで、またその後、未知のウイルスへの対応は試行錯誤の連続であった。本稿は、2020年の横浜みなと博物館のCOVID-19への対応の記録である。加盟館職員のみなさまの今後の参考となれば幸いである。

横浜みなと博物館の休館及び活動概要

当館は、横浜市の要請を受け2020年2月28日（金）より休館した。3月15日（日）までの予定だったが、4回の延長要請があり、再開は6月2日（火）、94日間の休館であった。再開館後も神奈川県に緊急事態宣言発出、また横浜市にまん延防止重点措置が断続的になされたが、当館はお客様にもスタッフにも感染者が出ず、営業を続けることができた。なお、再開後は消毒作業を行うため16時30分閉館（通常17時）とした。

休館中は展覧会や教育普及活動などを延期または中止した。再開館後は、COVID-19の感染状況や対策などを勘案しながら安全な実施について検討し、事業ごとに延期、変更、中止等の判断をした。

当館の大きな魅力の一つとなっているボランティア活動は、ワークショップを指導する教育活動ボランティアが2020年2月中旬から休止、また展示案内ボランティアは同2月中旬より活動を縮小し、その後休止した。

展示室の再開に向けて

2月28日（金）に休館後、再開に向けた検討を始めた。日本博物館協会や神奈川県、横浜市などから感染症拡大防止に向けた指針が複数回示されたが、具体的な記載は見当たらず、担当者としては、各館の実情にあわせて工夫せよ、ということと理解した。政府や自治体発表の対応方を注視しつつ、当館展示の特徴や通常期の利用状況を勘案しながら再開に向けた対応策について検討を重ねた。

COVID-19は飛沫感染や接触感染により感染するとされ、感染防止のため手や体の一部が触れる展示は変更しなければならなかった。あらためて当館の展示を見てみると、押したり、めくったり、のぞいたり、画面を触ったりなど、展示のために手や体の一部が展示具や装置等に触れるところが60カ所以上もあった。まずは触らなくても理解できる展示へ変更することが必要であった。

感染予防に必要な作業を整理し、「再開に向けた対応マニュアル」を作成した。展示具や装置等の改変や変更作業は、5月に入って感染者数が減少してきてから始めた。めくって見る展示をめくら

写真１　変更前の「フィールドへ行こう」展示
めくると解説とアクセスマップが見られる展示

写真２　変更後の「フィールドへ行こう」
アクセスマップ部分をパネルにして壁面に
はりつけた

写真３　「横浜市歌」が聴ける展示
スイッチボタンから足で踏んで選べるように
変更した

なくても見られるようにする、スイッチボタンで選ぶ展示を足で踏んで選ぶようにする、といった展示方の変更の他に、感染予防啓発サインの掲示、館内ソファや椅子の移動や利用禁止サインのとりつけ、消毒液の設置などを行った。こうした開館準備作業におよそ2週間費やした。

再開に向けた作業と並行して、運営に必要な以下のマニュアルを作成した。

①　消毒マニュアル（再開後の展示消毒作業用）
②　横浜港操船シミュレーター業務についての対応マニュアル
③　館内最大入館者数の設定
④　急病人が出た際のフローチャート

①の消毒マニュアルは、一部のスイッチボタン、手すり、ソファや椅子等の消毒を行うため、作業や役割分担を記載したものである。②横浜港操船シミュレーター業務についての対応マニュアルは、当館人気の操船シミュレーターにおいて、体験したお客様ごとにハンドルやレバー等の消毒を行うこと、記念品の贈呈はトレイでの受け渡しにするなどを記載した。③館内最大入館者数の設定は日本博物館協会のガイドラインと近隣施設の事例を参考に作成した。当館では、4m四方（16㎡）に1名で計算し、常設展示室ならびに特別展示室合計で館内滞留者150名を限度とした。④急病人が出た際のフローチャートは、急病人発見時にも落ち着いて行動できるように作成した対応マニュアルである。種々の準備を整えて、6月2日（火）に再開館した。

再開後、準備が足りなかったと反省したのは、経験のない消毒に関することであった。

消毒用のペーパータオルや手袋などは、ビニール袋に入れて密封し燃えるゴミとして廃棄する。感染症対策用物品は、使用から廃棄までを念頭に準備が必要である。消毒液やペーパータオル等の消耗品は準備していたが、廃棄用のビニール袋の購入を忘れており、再開後に慌てて買いに走った。忘れがちであるが、毎日消費するものなので事前の準備が必要である。

また、消毒後のゴミを減らすため、お手洗いに流すこともできる水溶性ペーパータオルが後日導入されたが、消毒液を使っているうちにタオルが溶けてしまい、使用しにくかった。使い方にコツがあるのかもしれないが、不溶性の方が消毒作業は容易であった。

館内には6か所手指消毒液を置いた。使用の際に液が床に飛び散り、床面に白いシミがついてしまった。このシミは通常の清掃では落ちなかった。消毒液のボトルを固定して使用範囲を限定し、さらに床面にビニールシートを敷くべきであった。また、子どもが手指消毒したときに、液体消毒液が顔の近くに飛んだと館内スタッフから報告があり、子どもが使う場所は飛び散りにくいジェルタイプの消毒液に変更した。

館内ライブラリーの再開

ライブラリーも展示室と同時の再開を検討していたが、展示室内の改変や変更作業量が多かったこともあり、まずは展示室の円滑かつ安全な運営を優先し、当面の間ライブラリーを休室することとした。

開室までに、日本図書館協会の「図書館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」や近隣図書館の再開状況を確認しながら、準備及び再開後の対応をまとめた「横浜みなと博物館ライブラリーの再開について」マニュアルを作成し、準備作業を進めた。利用者からの要望も設けて6月30日（火）に再開した。

ライブラリーは、通常はテーブル5台と28席の座席がある。密を避けるため、テーブル1台につき1～2名で利用していただき、1度に入室できる人数を最大5名とした。また、テーブル1台を利用後の図書返却場所にした。利用時間は他の施設を参考に、1名あたり最大1時間までとした（12月に利用者の要望等により2時間に変更）。

写真４　ライブラリー　図書返却場所を設けた

利用した図書は書棚に戻さず、上記の返却場所へ置いてもらった。感染拡大防止のため、上記図書館協会のガイドライン及び他施設の対応を参考に、利用した図書を一晩放置し、翌朝書架にもどした。図書消毒器の購入を検討したが、殺菌効果が不明であったため導入しなかった。レファレンスサービスや複写サービスは従来通りとし、スタッフはマスクとビニール手袋を着用し、カウンターに設置したビニールカーテン越しでの対応とした。金銭や複写物等の受け渡しはトレイを使用した。検索機は消毒液を近くに置き、手指消毒後の利用をお客様にお願いした。利用後、スタッフはお客様が利用したテーブル、椅子、ロッカー等を消毒した。

確実に利用したい方には電話で予約してもらったが、再度の休館も想定されたため、スタッフの提案で予約の際に連絡先を伺うこととした。

展覧会等の実施について

2020年度は規模の大小はあるものの、8本の展示を行った（当初7本開催予定）。秋に開催を予定していた企画展は、2020年春以降の在宅勤務や外出制限等により借用先での現地調査等が難しくなったため中止とした。また、館内の柳原良平アートミュージアムで開催する特集展示3本は、東京オリンピック開催にあわせた展示を別の内容に変更したほか、会期を変更また延長して実施した。新たに、再開館記念展示「なるほどミナト横浜展」と7月からは「海事産業応援フォトコン作品展」を実施した。「なるほどミナト横浜展」は、当館で毎年春に実施している横浜港の歴史遺産を歩きながらめぐる教育事業「なるほど！ミナト散歩」（休館のため中止）を写真パネル等で紹介するもので、横浜港の歴史を「歩いた気持ち」になって学んでいただこうと企画したものである。また、「海事産業応援フォトコン作品展」はコロナ禍のなかでエッセンシャル・ワーカーとして奮闘する海事産業を応援する写真展である（特別協力・日本海事新聞社）。

再開後、外出制限の呼びかけもあり来館者は少なかった。ある職員が「世の中は外出マインドにない」と言っていたが、まさにその通りで、博物館の入館者数は、2020年6月は前年度比30％程度であった。連絡をくださったボランティアさんからも、感染が不安でなるべく公共交通機関を利用しないようにしている、出かけるのは近所だけにしている、などのお話しを伺った。

外出しにくいのならばこちらから出向いたらいいのでは、との発想から「海事産業応援フォトコン作品展」は館内での展示のあと、横浜市戸塚区役所と瀬谷区役所でスペースを一部お借りして巡回展示を行った。区役所には、日々区民が各種申請や相談に来ており、コロナ禍でも区役所を訪れる人は多かった。博物館で来館を待っているよりも多くの人に見てもらえたと感じている。

写真５　横浜市戸塚区役所で実施した
「海事産業応援フォトコン作品展」

写真７　「学芸員のワンポイント展示解説」の様子
学芸員はマスク、フェイスシールドを着用し、
ハンズフリー拡声器を使用した

教育普及活動の実施

予定していた教育普及活動は多くが中止となったが、感染状況をみながらできる範囲で再開した。

通年の教育普及事業のうち2つを8月から再開した。毎週土曜日に実施していた「キッズのためのクイズラリー」は、従来はスタッフがクイズ用紙を参加者に手渡しし、答え合わせを行っていた。これを、スタッフと接しないようにやり方を変更した。クイズ用紙にクリップ鉛筆を挟んで博物館入り口に置き、希望者に自由に持っていってもらう。

写真６　「キッズのためのクイズラリー」
クリップ鉛筆付きの問題用紙の配布

館内の展示を見ながら回答し、正答を出口に掲示、または答えの記された用紙を配布した。触ったり体験したりする展示が少なくなっていたので、楽しそうに参加されるお子様の姿も多くみられた。

また、同じく8月より再開した学芸員のワンポイント展示解説は、従来の定員15名程度を10名に減らして実施した。学芸員はマスク、また状況によってフェイスシールドを着用し、さらに聞きとりやすいようハンズフリー拡声器を利用することもあった。お客様も通常よりも少し離れて参加され、感染症に留意している様子が見られた。この事業は常連の参加者もおられ、再会を喜び合ったことを思い出す。

また、「おうちで船の工作にチャレンジ！」を7月末にWEBサイトに公開した。当館で実施している「牛乳パックの船」と「ポンポン船」の作り方を画像と文章で紹介したものである。ＷＥＢサイトでの公開は、外出しにくい方や遠方の方にも有効であるとの報告もあり、当館では冬に開催した企画展「日本の練習船」でも展示データ等を複数回WEB上に公開した。今後も博物館の事業のひとつとしてWEBコンテンツを増やしていく予定である。

ボランティア活動

横浜みなと博物館には常設展示を紹介する展示案内ボランティアと、ペーパークラフトや船の折り紙などを指導する教育活動ボランティアが活動し、およそ50名が登録している。どちらの活動も来館者にとても好評である。

COVID-19拡大防止による影響は、2月11日

（火・祝）の教育活動ボランティアの活動休止から始まった。ワークショップ指導の際、参加者とボランティアが密接になるためである。また、展示案内ボランティアは2月14日（金）より不安に感じられる方は休んでいただくことにした。その後、2月28日（金）からの休館にともない、展示案内及び教育活動双方のボランティア活動は休止となった。

当館では活動再開を模索し続けた。4月に予定していたボランティア登録証交付式や感謝状贈呈式は、2部制での実施を検討した（最終的には中止）。6月に再開館した後は、教育活動ボランティアの活動は密接を避けられないため当面の間活動を休止することとし、まず展示案内ボランティアの再開について検討した。このときは、マスク及びフェイスシールド着用による暑さと熱中症回避のため夏の間は活動を休止し10月再開を目指すこととした。その後、COVID-19に加え、インフルエンザの流行が予想されたことから年度内いっぱいの活動休止となった。

ボランティアのみなさんへは、活動休止から2020年度末まで14回にわたって郵便で博物館の近況をお知らせした。ボランティアの方から、「手紙をもらうとつながっている感じがしてうれしかった」という感想をいただいたことが印象に残っている。

休館前、博物館には毎日数名のボランティアが来て、本来の活動だけでなく、博物館全体にわたって常に気を配ってくださり心強い存在であった。ボランティアのいない博物館はとても広く感じられ、あらためて当館の大きな力であると感じたのであった。

最後に

COVID-19への対策は、日々改善した。操船シミュレーターでは、順番待ちのお客様の待機列が密にならないように、床面の待機場所表示の位置をたびたび変更した。スタッフは日々の消毒作業以外にも、団体客来場後には消毒作業を行った。また、お客様の見学行動を観察しながら消毒液の場所もたびたび変更した。こうした日々の努力と改善が、安全な運営につながったと感じている。

近隣博物館や図書館の方々には、お忙しいなか大変親切にコロナへの対応についてご教示いただきました。おかげ様で安全に活動することができました、この場をかりて御礼申し上げます。